

ニュージーランド海外研修 30 年の足跡

新井正彦*

キーワード：国際化、海外研修、ニュージーランド、30年

はじめに

江戸川大学は、国際化・情報化に対応し、社会に貢献できる人材の育成をめざし、社会学部応用社会学科、マス・コミュニケーション学科の1学部2学科体制の大学として1990年4月に開学した。

教育理念で提唱された柱の一つである国際化への対応を具現化したものが、ニュージーランド海外研修の実施である。

1990年の開学以来実施されてきた、ニュージーランド海外研修は「語学の重要性、異文化体験による視野の拡大」を念頭に、新入生の必修科目（現在は選択科目）として設けられ、2019年度に30周年という節目を迎えた。2019年9月には、海外研修スタート時からの提携校であるニュージーランド国立マッセイ大学で、大学主催の「30周年記念レセプション」を開催していただき、この研修の持つ歴史の重みを改めて実感した。

本稿では、江戸川大学における海外研修の30年の歩みを振り返り、その足跡と意義を検証する。

1. 海外研修のねらい

本学における「海外研修の目的」は、下記に列挙した5つのねらいによるものである。

- (1) 国際人として成長するための重要な教育の機会である。
- (2) 生きた国際コミュニケーションのツールとしての英語力を育成する。
- (3) 海外の異文化を理解し、相手国の社会や文化について学ぶことによって、国際理解のための能力を高める。
- (4) ホームステイを通じ、欧米の生活、地域社会などのルールを学び、我々日本人の暮らしや文化との比較のなかで自分の生き方を考える契機となる。
- (5) 日本を含む環太平洋文化圏の重要な友好国としてのニュージーランドの多様な社会文化や政治経済などについて理解し、訪問先の大学や地域との交流を通じて、国際親善に貢献する。

また、研修実施に際し、ニュージーランドが研修先に選ばれた理由として以下の5つの点が挙げられる。

- (1) ニュージーランドは北半球にある日本とは反対の南半球にあり、季節は逆であるが、両

2019年11月30日受付

* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 地域研究 (ニュージーランド), 日本文学風土学

- 国とも広大な自然に恵まれ、時差もあまりなく学ぶ環境として快適である。
- (2) イギリスの古き良きヨーロッパ文化の伝統を残し、明るく社交的な国民性を持ち、しかも日本と友好国で留学生の受け入れに熱心である。
 - (3) 先住民族や東南アジア系、中国系、欧米系など多様な民族が共生する多民族国家であるが、生活習慣は堅実で、極めて犯罪が少ない。
 - (4) 両国の大学や高等教育機関の学問的水準が高く、かつ英語を第二外国語として学ぶ学生のため英語教授法を研究した教員が多い。学生交流の実績があり、指導を安心してお願いできる。
 - (5) ホームステイで日本人学生を温かく迎えてくれる家庭が多く、日本人学生とのコミュニケーションやホストとしての経験が豊かなファミリーが多い。

この海外研修のねらいは、語学研修と異文化体験である。現地では原則的に、学生一人に一家族のホームステイ滞在を義務づけている。一日の研修内容は、午前中（9時～12時30分）が語学研修、午後は語学研修（13時30分～14時30分）、午後の語学研修がない場合はホストファミリーと過ごすか、またはアクティビティを選択し、ニュージーランドの文化に触れるように組まれている。

2. 海外研修 30 年の歩み

この海外研修の形態が「新入生全員参加を原則とし、研修実施期間は8-9月の3週間」となったのは第2回（1991年度）からである。

第1回（1990年度）は12月に実施し、期間は2週間、参加は希望選択というものであった。最初に研修の受け入れ校となったのはワイカト大学（ハミルトン市）、マッセイ大学（パーマストン・ノース市）、オタゴ・ポリテクニク（ダニーデン市）の3校である。各コースとも原則全員ホー

ムステイであったが、オタゴ・ポリテクニクでの研修に参加した男子学生のみホームステイかドミトリー（大学学生寮）の選択が可能であった。

第2回から海外研修は応用社会学科（現・人間心理学科）、マス・コミュニケーション学科2学科の新入生の必修科目となり、研修期間は9月の3週間、全員ホームステイに切り替えた。これはドミトリーの場合、授業後に日本人ばかりが集まり、宿舎に帰っても英語での会話がほとんどなかったことによる。研修校もカーリントン・ポリテクニク（オークランド市）、クライストチャーチ教育大学 CCEL（現・カンタベリー大学教育学部 CCEL クライストチャーチ市）の2校が加わり5校となった。参加人数も1回目の104名から389名という巨大プロジェクトとなった。以降、第16回まで約400名規模の海外研修が15年間続くことになる。

第3回（1992年度）からウエリントン教育大学（ウエリントン市）、リンカーン大学（クライストチャーチ市）の2校が加わり、オークランド市での研修校はオークランド教育大学（現・オークランド大学教育学部）に変更された。これによりニュージーランド主要都市（オークランド、ハミルトン、パーマストン・ノース、ウエリントン、クライストチャーチ、ダニーデン）の国公立大学での海外研修実施（6都市7コース）という原型が確立された。

第6回（1995年度）から、オークランド近郊のアルバニーに、新たに開学されたマッセイ大学アルバニー校（オークランド市近郊）が研修校に加わった。オークランド市街からハーバーブリッジを渡り、バスで約30分という利便性の良い立地条件は、本学学生の海外研修に最適な環境であった。

第7回（1996年度）から若干の変更がなされた。前年の1995年度までは各コースとも2学科学生の交流を図る意味で両学科混成グループであったが、1996年度からマス・コミュニケーション学科の学生は北島の大学で、応用社会学科の学生は南島の大学で研修することとなった。研修も語学だけでなく、学科の方針に沿った異文化コ

コミュニケーションを重視する方向に転換した。

1997 年度の環境情報学科新設に伴い、第 8 回 (1997 年度) からはオーストラリアのモナッシュ大学 (メルボルン市)、キャンベラ大学 (キャンベラ市) の 2 校が研修校に加わった。環境情報学科 (現・現代社会学科) のオーストラリア研修は必修ではなく希望選択である。モナッシュ大学には環境情報学科の参加希望学生、キャンベラ大学には 3 学科の中から英語力向上、TOEIC の高得点獲得を目指す学生を対象に参加を募った。キャンベラ大学にとって、大学単位での研修学生の受け入れは初めてのケースで、江戸川大学がその第一号となった。そのため、江戸川大学、キャンベラ大学の双方ともにプログラム編成、研修学生やホームステイの対応など、試行錯誤の 3 週間の研修となったが、この時の試行錯誤が以後の研修に活かされ、オーストラリア研修は第 16 回 (2005 年度) まで継続して実施された。

第 9 回 (1998 年度) からはモナッシュ大学は環境情報学科、キャンベラ大学は人間社会学科とマス・コミュニケーション学科の学生を対象とする研修校 (第 12 回以降はマス・コミュニケーション学科の学生のみ対象) となった。特にモナッシュ大学では、「市内を還流するヤラ川の景観観察及び環境フィールド」、「アボリジニ文化の探索」、「ペンギン生態観察」といった環境情報学科の学生に適応したプログラムが生まれ、参加学生のみならず引率教員からも高い評価を得て好評であった。

2000 年度には経営社会学科が新設されて 1 学部 4 学科体制となった。経営社会学科の学生は「海外研修」を希望選択とし、第 11 回 (2000 年度) から初参加となった経営社会学科の学生 14 名は、環境情報学科の学生とともにオーストラリアのモナッシュ大学に参加することになった。

第 15 回 (2004 年度) から、「海外研修」は科目名を「海外異文化研修」と改変した。4 学科体制になって以降、語学研修プログラムの見直しを図り、授業プログラム及びアクティビティにメディア・スタディと異文化理解の要素を組み込むように各大学に要望したことによるものである。

授業では地元テレビ局及びラジオ局や新聞社訪問、現地小学校訪問等を取り入れ、マス・コミュニケーション学科の学生に適したプログラムへシフトし、アクティビティには酪農国ニュージーランドを知るための農場見学、先住民族マオリの文化をより深く理解するためのマラエ訪問やマオリ・カービング、国立博物館 (テ・パパ) 見学等を組み込んでもらって異文化理解をより重視するプログラムへの移行が図られた。

2006 年度の情報文化学科新設に伴ってメディアコミュニケーション学部が開設され、2 学部 5 学科の新体制となった。17 回を迎えた海外研修もマス・コミュニケーション学科は必修、人間心理学科、ライフデザイン学科 (現・現代社会学科)、経営社会学科、情報文化学科の 4 学科は希望選択となった。

2009 年度に、マッセイ大学とオタゴ・ポリテクニクの両校と、それぞれ海外研修提携 20 周年を迎え、その翌年 2010 年度にはカンタベリー大学 CCEL とも海外研修提携 20 周年を迎えることができた。マッセイ大学では大学主催の提携 20 周年記念レセプションが開かれ、Ian Warrington 副総長 (当時) が、「マッセイ大学は 100 年の歴史があり、その中でも 20 年という長きにわたる江戸川大学との提携はたいへん重要な位置を占めるものです」と述べられた。マッセイ大学とオタゴ・ポリテクニクとの「海外研修提携 20 周年」は、地元新聞 “Manawatu Standard”, “Otago Daily” でも大きく報道された。20 年間継続して実施されてきた本学の海外研修が、両大学だけでなく 2 つの都市においても認知されたことを示すものであった。

第 24 回 (2013 年度) からマス・コミュニケーション学科も「海外研修」が希望選択となり、広く全学科に「基礎・教養科目」として開放され、実施された。

2014 年度からはこどもコミュニケーション学科が新設されて 2 学部 6 学科体制となったことにより、ニュージーランド海外研修も新カリキュラムによる科目改変が行われた。従来の 3 週間のニュージーランド海外研修を「ニュージーランド

研修Ⅰ」(1年次配当6単位)とし、さらに英語力向上を目指す学生のニーズに応えるべく、4週間の長期研修として「ニュージーランド研修Ⅱ」(2年次配当6単位)を新設した。また、例年2-3月で実施されている6週間のスコラシップ英語特待生短期留学を「ニュージーランドスコラシップ」(自由科目6単位)として単位認定することとなった。これにより、学生は希望すれば半年に1回のペースでニュージーランドへの研修留学が可能になったのである。

2014年度は、マッセイ大学と「海外研修提携25周年」を迎えることができ、マッセイ大学では大学主催の記念レセプションを開催していただいた。25周年の記念レセプションでは、Stuart Morriss 副総長が「このたび提携25周年を迎えられたことはたいへん喜ばしいことであり、今後ともより一層友好関係を深めていきたいと思っております」と、パートナーシップの更なる継続と強化に言及された。

2016年度は、4月に就任された小口彦太新学長の「本学学生には在学中に一度は海外を体験して卒業してほしい」という強い希望をもとに、新しい科目として「海外体験研修」が検討され、2017年度から開講、実施されることとなった。既に実施されている「海外研修」に比べて、3泊4日と研修期間は短く、費用負担も軽減(補助金2万円)されての実施であった。2016年度はパイロット版としてシンガポールとマレーシアの2か国での研修実施となった。2-3月期での実施となり、シンガポール研修17名、マレーシア研修5名の参加があった。4日間という短期間の研修であったが、参加した学生からは「海外に行くと世界観が変わる」、「物凄く濃い4日間」、「とても充実していた」との高評価を得た。

2017年度は「海外体験研修」(2単位)とともに、より語学力向上を目指す学生の要請に応える形で「長期海外研修」(自由科目12単位)が設置された。2名の学生が1-5月にマッセイ大学に研修参加した。2名の学生は帰国後に受験したTOEICで高得点をマークし、5ヶ月の長期海外研修による語学力向上の成果を示す形となった。

2018年度は、本学C棟1Fに国際交流センターが開室され、スタッフに語学堪能な4人を迎えて、4月から国際交流センターが本格的に動き出す中で、「海外研修」も転換期を迎えた。

国際交流センター室の4人のスタッフと国際交流センター運営委員の先生方の尽力のもと、海外研修の選択コースが「海外体験研修」(2単位)、「異文化理解研修」(4単位)、「語学研修(オセアニア)」(4単位)、「語学研修(欧米)」(6単位)、「海外長期研修(オセアニア)」(自由科目12単位)、「海外長期研修(欧米)」(自由科目12単位)と多岐にわたって設定され、学生にとって海外に行く選択肢が大幅に増えたのである。

具体的には、2017年度から開講された「海外体験研修」は、3泊4日の研修期間を5泊6日に延長し、訪問国をシンガポールに絞った。この研修は、まさに海外研修入門編である。

従来の「ニュージーランド研修Ⅰ」は、「異文化理解研修」となり、研修期間が3週間から2週間へと短縮された。その代わりに、従来の「ニュージーランド研修Ⅱ」が「語学研修(オセアニア)」となって、4週間の研修期間は変わらないまま、1年生にも科目開放されて1年次から履修可能となった。

同時に「語学研修(欧米)」が新たに開講され、アメリカ合衆国オレゴン州のポートランド州立大学、カナダマニトバ州ウィニペグ大学での研修2コースが新設された。ポートランド州立大学のプログラムは、トライアルとして2017年8月に4週間の期間で4名の学生が受講した。ウィニペグ大学は、2018年4月に研修担当の金田正明委員が現地を訪問し、ウィニペグ大学キャンパス見学、大学関係者とのミーティング等を経て、本学プログラムに決定したものである。

3. 海外研修実施 30 周年——マッセイ大学 提携 30 周年記念レセプション——

2019年度は海外研修実施30年の節目の年であった。

マッセイ大学では、海外研修提携30周年に合

わせて大学主催の記念セレモニーが開催された。本学からは、マッセイ大学からの招待を受けた小口彦太学長と新井とともに 20 名の研修参加学生が出席した。セレモニーは「マオリ式歓迎レセプション」で、9 月 1 日（月）午前 9 時からマッセイ大学で最も古い建物であるオールド・メイン・ビルディング（Sir Geoffrey Peren Building）で開催された。

セレモニーはすべて先住民族マオリの式典形式に則って行われ、招待された側は女性を前、男性を後にして列を作ってホール内に入り、マオリ語による歓迎スピーチと歓迎の歌で迎えられた。小口学長による提携 30 周年記念スピーチと学生 20 名による歌の返礼の後、マッセイ大学 PaCE ディレクターの Andrea Flavel 氏から江戸川大学とマッセイ大学提携 30 年の歴史と今後の更なる連携強化への期待を込めたスピーチが披露された。最後に出席者全員によるホンギ（マオリ式挨拶）を交わして式典は終了し、懇親会となった。この歓迎レセプションには、1990 年から 30 年にわたる、本学の海外研修実施に深く関わってくださった黎明期におけるマッセイ大学の教員・スタッフも招待されており、懐かしい顔触れが多数出席して下さって旧交を温めることができた。

式典後、場所を Wharerata（スタッフクラブ）に移して、江戸川大学の小口学長とマッセイ大学の Stuart Morriss 副総長の間で 30 周年記念品の贈呈式が行われた。この席で Morriss 副総長は「提携 30 周年を迎えられたことをたいへん嬉しく思い、これからもより一層友好を深め、40 周年、50 周年と継続していきたい」と、両校の更なる提携強化と将来展望を述べられた。このニュースはマッセイ大学広報誌“Massey News”に掲載され、マッセイ大学 HP でも紹介された。

朝 9 時から午後 1 時 30 分までに及ぶ一連の記念セレモニーに出席して、海外研修提携 30 周年という長い歴史の重み、そして継続することの重要性を再認識することが出来た。

おわりに

この 30 年間でニュージーランド海外研修に参加した学生数は 6,084 名を数え、これは本学の学生の 2 人に 1 人は海外研修を体験していることを意味している。

海外研修の体験を通して、学生は確実に成長し多くのことを学んでいる。「自国の文化について無知なことに改めて気づき恥ずかしかった」、「日本について、異国に来て初めて知ることがたくさんあった。異国を知るより、まず自分の国をもっと知ることが大切だと本当に思った」、「国際人とは、単に外国語に強い人のことではない。海外でも通用するマナーや世界的な視野を身につけていなければならない」といった学生の感想や意見は、本学の目指す海外研修の「英語を学ぶとともに、異文化コミュニケーションの体験的学習と視野の拡大」という意図が、学生に反映され浸透していることを物語っている。

開学当初、国際化への対応を念頭に「ニュージーランド海外研修」でスタートした海外研修が、30 年を経た今、シンガポールを対象とした「海外体験研修」、中国を対象とした「海外体験研修（中国）」、ニュージーランドでの「異文化理解研修」、ニュージーランドかオーストラリアを選択できる「語学研修（オセアニア）」、アメリカかカナダを選択できる「語学研修（欧米）」、現代社会科学の専門科目「海外専門研修」、経営社会科学の専門科目「海外経営研修」と、選択できる海外研修が多岐にわたって整備された。

また、2017 年 4 月に華中師範大学（武漢市）、2018 年 10 月に上海外国語大学（上海市）と学術交流協定が結ばれ、マッセイ大学とも 2018 年 8 月に正式な学術交流協定を結ぶことができた。2019 年 9 月にはオーストラリアのボンド大学とも学術交流協定が成立した。これにより、各大学と本学学生の研修プログラムがより円滑に推進することが可能になると同時に、教職員の相互交流の促進も期待されることになった。

その国際交流の一環として、2019 年 9 月に華

中師範大学外国語学部 4 年の曾徳穎秋さんが交換留学生として来学した。交換留学期間は 1 年間である。本学でのキャンパスライフを楽しみながら多くのことを学び、有意義で充実した留学にしてほしいものである。

今後は、海外研修に参加して「語学の重要性、異文化理解による視野の拡大」に目覚めた学生の意識をさらに高め、ステップアップさせる環境を整えることが求められる。

本学の海外研修が 30 周年を迎えられた背景には、海外研修実施に際し、深く関わって下さった多くの教職員の皆様のご協力ご尽力があったからに他ならない。江戸川大学の大学関係者の皆様はもちろんのこと、マッセイ大学をはじめとするニュージーランドの各大学、オーストラリア、そしてアメリカ合衆国の大学関係者の皆様に深く感謝し、御礼申し上げる次第である。